

「3月15日」に何があったのか——
今後の被曝予防のための実験的検証

ルポライター・明石昇二郎 &
ルポルター・ジュ研究所

子どもたちが
被曝してしまった…

「安全だ」「大丈夫」——。そんな抽象的かつ情緒的な言葉が、テレビを占領し続けている。健康や食品に関する話題になると、専門家や権威を自称する人たちから決まってこの言葉が乱発され始める。

耳障りはいいかもしれない。一時的な精神安定作用もあることだろう。だが、鵜呑みにし続けた結果、あなたがガンをはじめとする晩発性の病気になったとしても、彼らは何の責任も取ってくれない。放射線や放射性物質が健康に害をもたらすことは、否定しようのない事実であり、常識である。日本国民を小バカにした非科学的かつ無責任かつ非常識な言説（ノイズ）を、このまま放置してはならない。

抽象的な言葉に惑わされず、今こそ事実を注視する必要がある。4月2日には、核戦争に対処する米海兵隊の専門部隊「CBIRF」が東京の米軍横田基地に到着した。福島原発事故のさらなる悪化に備えるためだという。「安全」で「大丈夫」なら、なぜ彼らがわざわざ来日する必要があるのだろうか。答えは明瞭。原発事故はまだ何も終わっていないからだ。

原発の直近から避難してきた一般市民が被曝していることが判明し始めた3月12日頃は、放射線測定器で1万3000カウント（CPM）以上を計測した人のすべてを「全身の除染が必要な被曝」とみなし、シャワーで体を洗い流していた。が、除染を受ける人が増え始めた3月14日になって福島県は、いきなりその基準を引き上げる。国が派遣したという「放射線専門家」氏の意見を聞き入れ、基準を7倍以上の「10万CPM以上」としたのだ。

それ以降、「今日は何人の市民を除染」といった類いの情報が報道から消えた。しかし、フクシマから放射能が消えたわけでも、「市民

被曝」の事実が消えたわけでもない。単に事実が報道されなくなっただけの話である。こうして真実は為政者によって恣意的に隠蔽されていく。

福島第一原発の30キロ圏外にありながら、原発から漏れ出した放射能で高濃度に汚染された福島県飯舘村周辺。ここに住む15歳以下の子ども約550人について、甲状腺の被曝線量を調べた結果が4月2日、国から発表された。「いずれも問題なかった」のだという。最高で毎時0・07マイクロシーベルト。国の原子力安全委員会が定める基準値（毎時0・2マイクロシーベルト）を下回っているから「問題なかった」。しかし、だ。

子どもの喉付近に放射線測定器を当てると、針が触れるのである。原発事故でもなければありえない光景だ。子どもたちは、すでに放射性ヨウ素を甲状腺に取り込んでしまった。にもかかわらず、「問題なかった」と言い切れる残酷さを「科学的」と呼ぶのなら、そんな役に立たない「科学」などいらぬ。

国が派遣した「放射線専門家」は、この子どもたちにヨウ素剤を服用させる指示を出さなかった。もはや手遅れとして、「科学的」にサジを投げたのだ。「放射線専門家」の口から放たれる「安全だ」「大丈夫」という抽象的かつ情緒的な言葉へのお返しとして、彼らに「大バカ野郎め」「クソ野郎め」という言葉を送りたい。

パニックの発生を未然に防ぎ、秩序を守りたい——。そのことを最優先するあまり、国民の生命を危険に晒す「放射線専門家」。こんなもの、いらぬ。

こうした事態を招いた東京電力は、「自分たちも被害者」と言い訳した。いずれ同社は倒産するか国有化されるかして、法治国家の下、堂々と免責される。

これを「原発震災」という。10年以上前からこの危険が叫ばれ続けてきたのだが、無視され続けてきて、今日の惨事を迎えた。

何が起きた時に

放射能の大量拡散が発生するのか？

フクシマから漏れ出た放射能が、福島原発

から200キロ離れた首都・東京を直撃したのは、3週間ほど前の3月15日のことだった。東京では、その時に飛来したと思われる放射能がいまだに検出される。一体フクシマで何が起きれば、半径200キロを超える広範囲の放射能汚染が発生するののか。

そこで、今後の被曝予防のための処方箋を描くべく、3月12日から15日の間にフクシマで起きた話を報じた朝日・毎日・読売・河北新報の各新聞記事などをもとに、事故を時系列に検証し、整理してみることにした。

*

【3月12日】

・9時30分までに**福島第一原発1号機と第二原発の1〜4号機で「格納容器」の弁を開け、蒸気を放出（これを「ベント」または「ウエントイベント」という）。**
・14時19分に朝日新聞が、発電所周辺で放射性セシウムを検出と報道。
・15時29分、原発の敷地境界で1015マイクロシーベルト/時を観測。
・15時36分頃、**第一原発1号機で水素爆発。**
・21時頃、福島第一から120キロ北の女川原発で通常の4倍にのぼる放射線を観測。

【3月13日】

・5時10分、第一原発3号機で、原子炉の冷却機能喪失。9時前後、第一原発3号機で燃料棒が一時露出。
・9時20分、**第一原発3号機でベント。**
・16時19分、朝日新聞が、第一原発3号機の原子炉内に海水を注入し始めたと報道。
・福島県は同日、福島第一原発の3キロ圏内から避難した19人に、放射性物質が付着していたと発表。12日に見つかった3人に加え、住民の被曝は計22人に。

【3月14日】

・11時1分、**第一原発3号機で水素爆発。**建物の上部から赤い炎が出た後、きのこ雲のような灰色の噴煙が真上に数百メートルほど立ち上る。その後、大きな固まりがいくつも原炉上に落下。
・13時25分頃、第一原発2号機で原子炉の冷却機能喪失。

・20時7分に朝日新聞が、第一原発2号機の燃料棒全体が水から露出と報道。

・21時37分、第一原発の正門付近の放射線量が毎時3130マイクロシーベルトと、これまでの最高を記録。

・22時7分、福島第一原発の10キロ南にある福島第二原発のモニタリングポストの放射線量が、通常の260倍に。

・23時55分から翌3月15日の1時半ごろにかけて正門付近で0.02マイクロシーベルト/時の中性子線を観測。燃料が臨界している恐れ。中性子線は13日から15日にかけて正門付近で観測されていた。

【3月15日】

・0時、第一原発の10キロ南にある第二原発で、放射線の量が毎時113マイクロシーベルトに上昇。
・0時過ぎ、**第一原発2号機が原子炉格納容器内の蒸気を外気へそのまま放出（ドライベント）。**水を通した後に放出する「ベント」に比べ、「ドライベント」では放射性物質が高濃度のまま大気に放出される。つまり、炉心部と外気が一時的にでもつながったことを意味する。

・0時20分、福島県との県境にある茨城県北茨城市で、大気中の放射線量が上昇し始める。

・3時台、東京の放射線量は0.038マイクロシーベルト。

・4時台、東京の放射線量は0.147マイクロシーベルト。

・5時20分、茨城県北茨城市で5675ナノグレイを観測。

・6時頃、**第一原発4号機の使用済み核燃料プールで水素爆発。**原子炉建屋が損傷。建屋の壁に8メートル四方の穴が2カ所開く。

・6時10分頃、**第一原発2号機原子炉建屋内で爆発音。**格納容器の下部側にあるサプレッションプール(圧力抑制室)が破損した模様。

・7時、福島第一原発の正門で毎時965マイクロシーベルトの放射線を観測。

・7時台、東京の放射線量が0.051マイクロシーベルトまで落ちる。

・7時40分、**茨城県鉾田市で5343ナノグレイを観測。**放射能が南下し、東京を直指して

いることが判明。

- ・ 7時46分、第一原発から110キロほど離れた茨城県東海村の施設で、毎時5マイクロシーベルトを観測。10分間継続して基準値の5マイクロシーベルトを超えたため、国に対して原子力災害特別措置法に基づき通報。
- ・ 8時31分、福島第一原発の正門で毎時8217マイクロシーベルトまで上昇。同時刻の風向きは北東からの風1.5メートル。
- ・ 9時現在、第一原発から南に約50キロ離れた小名浜測候所（同県いわき市）付近では北東からの風が4.9メートル。関東の南岸には低気圧。
- ・ 9時台、東京の放射線量が0.465マイクロシーベルトに。
- ・ 9時38分、**第一原発の4号機4階の北西部付近で出火。**
- ・ 10時台、東京の放射線量が0.809マイクロシーベルトに。
- ・ 10時22分、2号機と3号機の間で30ミリシーベルト、**3号機付近が400ミリシーベルト（一般人の年間被ばく限度の400倍に匹敵）、4号機付近が100ミリシーベルトと、**単位がマイクロからミリへと桁違いに放射線量が上昇。枝野官房長官も会見で「身体に影響を及ぼす可能性のある数値であることは間違いない」。菅直人首相は、第一原発から半径20～30キロの範囲内の住民に屋内退避するよう求めた。
- ・ 正午過ぎ、放射能が福島県三春町に襲来。13時30分、「アールダン」数値が3桁になる。風向きが東、または東南東からの風に変わり、原発の風下になった。
- ・ 14時20分、三春町の「アールダン」がこれまでで最高の1151cpmを記録。

首都圏に襲来したのは「ドライイベント」による放射能

さて、これをどのように読み解けばいいのだろうか。

3月15日午前、首都圏に襲来した放射能は、どうやら第一原発2号機の「**ドライイベント**」（同日午前0時過ぎに実施）が主原因だったようだ。その後、第一原発2号機で起きた

「**格納容器破損**」（同日午前6時10分頃）にしても、原発周辺に北からの風が吹いていた時のこと。これも多少なりとも影響しているとみてまず間違いあるまい。次回、ドライイベントが実施された際にはぜひ気をつけてほしい。

一方、海からの風に乗って地元・福島県を襲い、飯館村周辺に高濃度の放射能汚染をもたらしたのは、これらに加えて「**使用済み核燃料プールの水素爆発&火災**」も関係している。ひよつとするとこれが主原因である可能性も高い。同日午後に福島県三春町で観測された放射能も、これが「枝分かれ」したものと推測される。

Fukushimaで次に何かが起きた時、いち早く把握すべきは「**風向き**」——。このことを、事故が完全に収束するまでの常識としたい。政府周辺には「放射能予報」を出す考えがないようなので、次の事故発生時、不運にも風下に当たる地域にお住まいの方は**自衛するしかない**。

*

ところで、政府で現在、福島原発事故対応を担当している細野豪志首相補佐官は、筆者が2001年に『サンデー毎日』で連載した原発事故シミュレーション記事「原発震災」の熱烈な読者の一人だった。細野氏は静岡5区選出の民主党衆議院議員であり、今から10年ほど前、沼津市で彼の地元支援者たちに対して、中部電力・浜岡原発が潜在的に抱える「**原発震災**」の危険について講演をしたことがある。細野氏とはそれ以来、一度も会う機会に恵まれていないのだが、彼はこんな仕事をしなくて政治家になり、沼津での筆者の講演を企画したのだろうか——と思う。今となつては、筆者のシミュレーションが少しでも救国の役に立つことを願うばかりだ。

配信元：ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇二郎

URL: <http://www.rupoken.jp/>